

# 特集 伊奈備前守忠次公 によるまちづくり

## 忠次ってどんな人？

「伊奈町」という名前の由来となった「伊奈備前守忠次」

名前を聞いたことがあっても、「忠次ってどんな人？」「なにをした人？」と疑問に思う方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そこで、伊奈に住むみなさんに、「忠次」のルーツを知っていただきたく、忠次とはどんな人物か簡単にまとめました！

## 出生から家康配下に復帰するまで

忠次は、西暦一五五〇年（天文十九年）、三河国幡豆郡小島（現在の愛知県西尾市）の小島城主である伊奈忠家の嫡男（正室の長男）として生まれました。幼名は熊蔵、その後家次と名乗っていました。

一五六三年（永祿六年）、忠家は三河一向一揆の際、一揆側に加わったため小島を追われてしまいました。その後、一五七五年（天正三年）に長篠の戦いに加わり功績をあげたことで、徳川家康の嫡男である松平信康に仕えることになりました。しかし一五七九年（天正七年）に信康が自害したため、忠次は父忠家とともに三河を去り、堺（現在の大阪府堺市）に住む伯父のもとに身を寄せます。

それから三年後の一五八二年（天正十年）、伊賀越え※の際に家康にお供し、家康配下に復帰しました。

※伊賀越え（神君伊賀越え）：堺滞在中に本能寺の変の知らせを聞いた家康は逃亡中に命を落とすよりはいさぎよく自害してしまおうと京都に向かおうとしたが、説得されて三河に戻ったと言われる出来事。伊賀（現在の三重県伊賀市）を通ったと言われることから伊賀越えと呼ばれている。



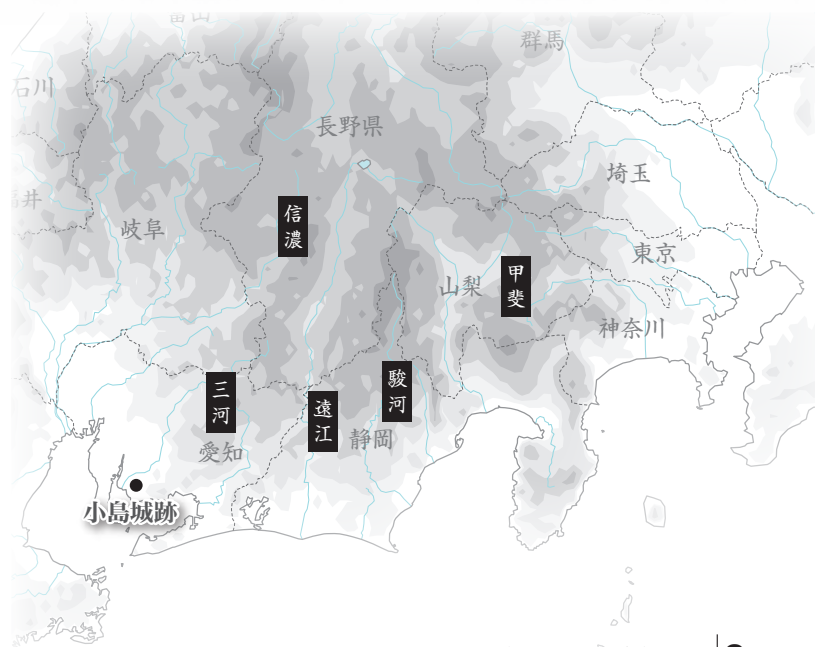
▲小島城跡入り口碑

## 五カ国総検地や小田原攻めでの活躍

再び家康の配下となった忠次は、一五八六年（天正十四年）に家康の近習（主君のそば近くに使える人のこと）となり、灌漑技術（農地に外から水を引く技術）を磨きながら、五カ国総検地※を実施して功績をあげました。

また、一五九〇年（天正十八年）の小田原北条氏攻めの際に駿河・遠江・三河（現在の静岡県・愛知県に位置する三カ国）の道路の普請（工事）等を行い、豊臣秀吉の信任を得ながら、地方巧者（農政に関わる優れた技術を持った官僚のこと）としての地位を固めました。

※五カ国総検地：家康が治めていた駿河・遠江・三河・甲斐・信濃の五カ国において行われた大規模な検地のこと。検地とは田畑面積・収量の調査を指す。



伊奈備前守忠次公  
によるまちづくり

表紙は伊奈町丸の内の伊奈氏屋敷跡にある頭殿権現社です。忠次公レキシまつりや散策路整備イベントなどの会場となっています。

## 伊奈町のルーツ“小室”への進出と備前守となった忠次

一五九〇年（天正十八年）、家康の江戸入府に伴い、それまでの功績が認められ、武蔵国足立郡小室・鴻巣の一万三千石（一説に一万石）を与えられ、小室に陣屋を築きます。これがちょうど現在の伊奈氏屋敷跡（伊奈町丸の内）に位置します。忠次は小室の陣屋を拠点としながら代官頭として領国の検地・利根川流域の河川改修と街道整備・江戸千住での架橋など関東を中心に基盤整備にあたり、一五九九年（慶長四年）ごろには、備前守（官職名）になりました。



▶小室陣屋の図（『新編武蔵風土記足立郡』）

国立公文書館所蔵



▲忠次が開削した備前堀（渠）用水（熊谷市、本庄市）

## 家康の側近としての活躍と晩年

一六〇三年（慶長八年）に江戸幕府が成立すると、家康の側近として全国の代官を駆使しながら幕領の支配を行いました。その間、築堤などの治水、用水整備などの利水といった灌漑工事や新田開発、年貢収取など多様な農政や地方支配を行い活躍しました。

忠次は単なる代官頭としての立場を超え、年寄衆（江戸幕府における上位役職）に近い役割まで果たすこととなりました。

一六一〇年（慶長十五年）、61歳でこの世を去り、鴻巣市の勝願寺に葬られました。



▲忠次が眠る墓（鴻巣市勝願寺）

主に農政に関する活躍で、まさに“関東の水を治めて 泰平の世を築いた”忠次のことを少しでも知っていただけたでしょうか。

現在の伊奈町では、「忠次公によるまちづくり」と称し、さまざまな事業を行っています。次のページでは、今までに行われた忠次関連事業を紹介します。